

暖温二帯植物いろいろ II

北 条 慎 一

S. Kitajo : Notes on Some Plants in warm and Cool temperate Zones II

J R 東海恵那駅よりの展望東に恵那山（海拔2189.8m）富士見台、根の上高原東北に中央アルプス、北に木曾御岳山、西に笠置山が見られる地域である。当恵那は極地微気候であり極めて複雑な気象である。

長野県と岐阜県の境にあり暖地性の植物と温帯性の植物が混生しておことは1990年5月の長野県植物研究会誌に書いたがまだ不十分であり第II報として書くことにした。

恵那山は山頂まで樹木があり山腹にミズナラ、ブナ、トチノキ、シラカバ、ダケカンバなどあり山頂にはトウヒが立林しておりヒノキの老木がある。春夏秋冬この恵那山を見ての生活は又格別である。

シュロは南九州の原産であるも各家々の庭に植栽されており、雌雄異株で初夏に葉の間に大きな肉穂花序の花が咲きみごとにすくすく伸びており種子が発芽して増殖する地域である。

アセビ。秋に花のすべてが出来種子も昨年の花が実り果実ができています早春に花が咲くもこの花は白色で葉の上に雪がつもった様になり開花期は長く3月頃より5月上旬頃までである。アブラツツジ。6月から7月頃開花する。ヒカゲツツジは中津川市苗木にあり北限であると思われる。ホツツジ、バイカツツジ。中津川市根の上高原にある。ミヤマホツツジは中津川市富士見台で筆者はみつけた。春はハルリンドウ。秋はツルリンドウ。恵那山の麓から山頂までである。秋に開花、果実は赤熟し、いわゆる花から果実まで観察できる。山野にあるタマアジサイは南限、コアジサイは北限と考えられる。サカキ。高木は恵那に自生のものがある。ヒサカキ。低木で神祭の際もちいられる。ブナノキ。恵那山黒井沢にある。イヌブナ。落葉高木で葉の裏面に長い絹毛がある。やや白色をおびている。ナンテン。常緑低木で

各家々の庭に植栽され種子から発芽して自生のものが多い。ヒレアザミは越年草で恵那の道ばたにあり葉や茎にトゲがあり人目を引く。アズマヤマアザミ。多年草であり秋ロゼット葉が解消し有限花序である。ノアザミ、ガンクビアザミなどもある。

アワダチソウ、オオアワダチソウ、セイトカアワダチソウは夏の終り頃から秋にかけて黄色の花をつけキク科植物特有の花である。この花の咲く頃は農家は米の収穫で多忙である。

オニナスビ。ドイツ原産でこの植物は葉にトゲがあり秋から初冬に開花し果実が見られ冬は果実黄色で人目を引く。オサバグサ。本州北部及び中部の高山の針葉樹林内に生えておる多年生草であるも筆者は恵那山頂に成育しているのをみつけた。

ヒイラギ。常緑亜高木で晩秋花が咲く。葉は若い頃はトゲが沢山あるも老木となれば次第に丸味をおびて来る。マツグミは暖地の常緑寄生低木でアカマツの枝にあるのを筆者は中津川市川上にあるのを見つけた。ヤマラッキョウ。晩秋の頃野原に紅紫色の花が咲き多年生の草で地上部は冬期全く枯れ注意しなければ見落してしまう。

ツタは冬期乾燥し岩や木に吸着根で着生しておる。テイカカズラ、キズタは暖地性のもので冬葉が落ちない。ニンドウ。冬期葉が落ちないが紅葉する6月上旬頃に開花し極めて良い香りを放つ。ヤブコウジ。山地樹陰に生育し開花は夏。晩秋から冬にかけて赤い果実がなり正月の盆栽に活用されている。

フユノハナワラビ。胞子葉1本と1枚の栄養葉からなり11月から12月にかけて胞子が出来風で散る。

冬、ハナノキ、ケヤキ、コナラ、ミズナラ、トチノキ、ウリノキ、ヤマボウシ、ホウノキ、ウワミズザクラなどの幹枝は生気つやつやである。

〔植物ニュース〕159. カミコウチャナギの挿木

先年木村有香先生からカミコウチャナギの苗木を頂き、その枝を挿木して成功したが、上高地の親木からの挿木は過去2～3年試みたが何れも不成功に終わった。これは適当な挿穂が得られなかったからのように思う。

ところがようやく昨年4本挿した中の1本が成功

した。よい挿穂さえあれば成功率は高いと思う。

ケショウチャナギの挿木も過去連続して試み、そのほとんどが成功した。ただこの場合植替えの時期を過らないことが大切のようである。この種の挿木は不可能とか、成功率1%とかの声を聞くが、それは方法が適当でないからであろう。（奥原弘人）